

「内側から見た中国」

1 - A 静岡文化芸術大学 青木咲樹

今回の訪中国では、上海・大同・太原・北京の主に4都市を巡りました。私にとっての初めての中国、渡航前は一週間中国で過ごせるのかなという不安と自分の目でリアルな中国を見ることができるというわくわくした気持ちでいっぱいでした。このレポートでは訪中を終えて考えたこと、自分の中でどのように中国のイメージが変わったのか述べていきたいと思います。

訪中国に参加する前の中国のイメージは、正直いいものではありませんでした。テレビやSNSで見る中国は、悪いイメージで塗り固められているように感じます。メディアだけでなく家族や友達と話すなかでも、「中国が好き！」と公言している人には出会ったことはありませんでした。この悪いイメージとは、学校で習うような歴史的なことではなく、爆買いや欠陥住宅など、最近のイメージです。このイメージやはり最近のSNSの投稿に影響されているなと思います。

では、今回の訪中を終えてどのように中国に対するイメージが変わったのか述べていきたいと思います。中国を訪れて大きく印象が変わったことは主に2つあります。1つ目は、中国人の方々の性格についてです。「中国人」というと、せっかちでルールをせわしないというイメージがありました。今思えば本当に失礼すぎる偏見だったと反省しています。今回交流した中国の方々皆さんとても優しく、サービス精神が高いなと感じました。中国のおもてなしとして、お客さんには余るくらいの料理を提供しおなかいっぱいになってもらう文化があることを知り、このことも中国の方々の優しさに繋がっているのではないかと思いました。日本では食事を残さないことが美德されていると思いますが、この中国の文化は実際に体験してみないと良さがわからないなと感じました。2つ目は、技術力の高さです。日本で過ごしていると「中国製よりも日本製のほうがいいよね、」という意見が多く、中国製品は安く大量に作っているイメージでした。しかし、実際に中国で過ごしてみると、日々高い技術によって中国社会が回っているなと感じました。キャッシュレスの発展もすごいですし、AlyPayやWechatを使ってみてPay Payよりもすごく便利でした。人口が多いからこそ、人間の行動の効率性を大切にしているのかなと思いました。

以上のように、私の中国へのイメージは変化しました。実際に中国を訪れることで印象が変わるだろうと予想はしていましたが、ここまで変わるとは思ってもみませんでした。またいつか家族や友達を連れて訪問したいです。また、1週間ほとんど初めて会うような大学生の皆さんと切磋琢磨しながら過ごしたこともかけがえのない経験となりました。パフォーマンスを行ったことも仲を深められた理由のひとつであると感じます。最後に、中国へ訪れる機会を与えてくださったすべての皆様に感謝申し上げます。日中友好協会、中日友好協会、双方の皆様のサポートがあったからこそその貴重な体験でした。今回の経験を活かし、日本と中国、両国の友好の架け橋となれるよう日々尽力していきたいと思います。

「中国と日本と私」

1-A 東北大学 大江力

まず、今回の訪中団をつくりあげていただいた日中友好協会の皆様、中国政府の皆様、その他関係者に感謝の言葉を述べたい。一週間の中国訪問のなかで、今後の人生の大きな糧となる経験をすることができた。私は、今回の訪中団は同大学の先輩に推薦をいただき参加した。自分はもともと、AIや最新技術に大きな関心があり、また、日本でも日々SNSやニュースなどを通して、中国に関する様々な情報は入手していたが、それらは一次情報ではなく、具体的な自分の感覚内に落とし込むことができていなかった。そんな中で、今回先輩から中国訪問の話をいただき、すぐに一言「行きます！」と伝えた。中国に行く前に自分が決めた今回の訪中のテーマは「やりたいと思ったことはやる」にした。たった一週間、されど一週間の訪中団をより濃密なものにするために、自分の中でやりたい、話を聞いてみたい、見てみたい、食べてみたいなどの様々な現地で得られるであろう感覚を大事にし、それらに素直に従う旅にしようと思った。余計なフィルターを外して、中国をそのまま感じ、現地の学生との対面でしか得られない話や感触、建物や自然、歴史から感じるオーラを体に取り入れ、さらに日本の学生同士の交流などを積極的に行い、行動しようと思った。

初日の上海で感じたことはすばり圧倒的な資金力だった。自分も今まで東京などで、過ごす機会はあったが、上海に並ぶ超高層ビル、また夜に煌々と光り輝く黄浦江沿いの連続した建物群には圧倒された。映画やSFにでてくるような未来の都市のようで、サイバーパンクのイメージが沸いた。夜でも、まるで昼のように周囲が明るく、活発な雰囲気が感じられた。一日目の夜にして、かなり中国らしさを感じさせてもらった。田子坊であった、自由時間では、気の向くままに行動したかったため、一人で田子坊の店を回った。印象的だったのは、どの現地の店員も目を合わせて、いろいろな説明を丁寧にしてくれたことだった。自分が回ったお茶のお店では、テーブルに座って、いくつかのお茶の特徴や入れ方、お気に入りのものなどを英語もしくは、中国語の翻訳によって行ってくれた。現地の方とうまくコミュニケーションができるか不安ではあったが、かなりお互いに意思疎通をすることができた。雲崗石窟では、92歳のおじいさんと簡単な単語の会話を中国語で行うことができた。ただ、一週間を通して感じたことだが、中国語に関しては、大学で一年間学んだとはいえ、英語を聞くのとはわけが違い、単語ではない、中国の文章を聞き取ることはほぼできなかった。想像していた感覚よりも聞き取るのが難しく、母国語と英語以外でのコミュニケーションの難しさを感じた。その感覚と同時に、近年の技術の発展により、スマホ一台あればある程度コミュニケーションをとることができるということも感じた。

他に印象的だったものは、自然や建築物の規模の大きさである。雲崗石窟、平遥古城、万里の長城、また北京に向かう新幹線から見た大地形などは圧巻だった。一つ一つの構造物の大きさ、またその数の規模が大きく、広大な中国、そしてその歴史を感じた。

訪中団の最も印象的なものは、やはり中日青年交歓活動であった。日本人同士で作り上げて

発表したパフォーマンスで会場を盛り上げられた達成感はもちろん、最後に、ステージで現地の多くの学生と交流できたのは、非常に一体感を感じた良い経験となった。

訪中団を通して、うまくは語れないが、国境とはなんなのか、国とはなんなのか頭で考えるようになった。現在世界情勢は、複雑化しているが、人類として、国間でより良い関係にしていきたいし、そのために、自分のような若い世代の交流活動は注力していきたいし、今回得られた日本、中国すべてのコネクションを今後も生かそうと強く思った。

「訪中を終えて考えたこと」

1-A 青森中央学院大学 紀本美月

私は 2025 日中友好大学生訪中団第 1 陣に参加し、今回のプログラムで初めて中国を訪れた。私は大学 1 年生の時に中国語を学んだ程度で、基礎的な能力しかなく、また、他の参加者はほとんど初対面で既存の友達もいない中、1 週間やっていけるのかと出発前は不安の連続であった。しかし、その不安とは相反に期待以上の素晴らしい経験となった。

まずこの訪中では、上海・山西省・北京の 3 都市を訪れ、各地で中国文化の体験や中国の大学生との交流、歴史・観光地巡りなどを 1 週間で行った。その中で特に印象深かったことは、各地の街並みである。上海の都心部に訪れた時は、近未来に来たのではないかと思うくらいすべての建物が煌びやかで、建物の最上部が地上からは見えないほど高く、心の底から驚いた。なぜこのように中国では建物が全体的に高層であるのかと、ガイドの方に聞いたところ、人口密度が非常に高く、限られた土地に多くの人を収容するためだったり、都市開発の急速な進展だったり、多くの背景があり改めて中国の建築スタイルについて考えることができた。また、山西省にある歴史都市、『平遥古城』に訪れた時には、何世紀にもわたる都市文化と商業の歴史が凝縮された、まるで生きた博物館のような存在であると感じた。そしてガイドの方が、「この平遥古城は中国でも少ない、現在も人々が生活している古城都市の 1 つで、およそ 4 万人が城壁の中にある古い住宅や商店で暮らしている。」と解説をしてくれた。これを聞いた時には、世界遺産に住むことができ、日常の生活と歴史が共存できる、なんて従来自分の考えにはなかったことあったため、とても驚かされました。

さらに、印象深かったこととして、中国の現地の人々や学生の温かな人間性に関心を受けた。今回の訪中では、さまざまな観光名所を巡る中で、現地の人々から気さくに声をかけられる場面が多くあった。多くの人が中国のおすすめの食べ物や観光スポットについて丁寧に教えてくれ、その親切で暖かな対応が非常に印象的であった。また、『山西大学』と『中国人民大学外国語学院』の 2 つの大学を訪問し、日本語を専攻する学生たちとの交流の機会にも恵まれた。会話は日本語と中国語を交えて行い、お互いの学校生活や日常について語り合うことができた。多言語で自然に会話するという経験はこれまでになく、非常に貴重な経験となった。さらに、現地の学生たちは、私が理解しやすいようにゆっくり、はっきりと発音したり、私の意志をくみ取ろうと真剣に耳を傾けたりする姿勢が印象に残った。これらの経験を通じて最も強く感じたことは、初対面であるのにも関わらず、まるで旧知の友人のように接してくれる距離の近さと温かさである。これは日本での日常生活ではあまり味わうことのない、新鮮かつ心に残る感覚であった。

今回の訪中を通じて、私は中国の歴史的・文化的背景の奥深さや、現地の人々の温かさ、そして日中の学生同士による心の通った交流を肌で感じることができた。この 1 週間の経

験は、単なる海外旅行や異文化体験にとどまらず、自分自身の視野を広げる大きな転機となった。今後はこの経験を糧に、より多角的な視点から他国や多文化を理解しようとする姿勢を大切にし、日中の相互理解と友好の架け橋となれるように努めていきたい。

訪中を終えて
関東学院大学
栗原 波音

今回、私は日中友好協会の大学生訪中団に参加し、上海・山西省・北京の三都市を訪問しました。この経験を通じて得た出来事や価値観の変化、そして今後自分が日中友好のために何ができるかという点について述べたいと思います。

まず訪中前の自分の中国に対するイメージについてですが、正直なところ、一般的な日本人が抱きがちな「横暴」「自分勝手」「迷惑をかける」といった否定的な印象は、自分の中にはあまりありませんでした。むしろ中国の人口は日本の約14倍であり、悪い人が目立つのは当然のことで、偏見を持つのは不公平だと感じていました。ただし、少し潔癖な面もある私は、衛生面やマナーの点では多少の心配はしていました。

今回の訪中は、私にとって初めて現地の人と深く関わる機会であり、非常に楽しみにしていました。まず上海では、都市の規模やビル群の迫りに圧倒される一方で、清掃状況などの面で日本との違いを実感しました。特に、ジンマオタワーのトイレに入ったとき、床に散らばった大量のティッシュを見て驚きました。観光地であり大都会であるにも関わらず、この衛生状態には少し戸惑い、「日本に生まれてよかった」と思ってしまったのも事実です。しかしこれは中国を批判しているのではなく、むしろ日本のトイレが世界的に見て異常に清潔であることを再確認した出来事でした。

次に訪れた山西省では、山西大学の日本語専攻の学生たちと交流を行いました。彼らの日本語のレベルの高さには驚かされ、自分の語学力の未熟さを痛感しました。会話の中では、大学制度や学生生活、流行などについて意見を交わし、彼らの日本文化に対する関心の高さとフレンドリーな姿勢に心を打たれました。こうした若者たちが将来、外交の場に立つようになれば、日中関係は確実により良い方向に進むだろうと感じました。

そして最後に訪れた北京では、中国人民大学の学生たちとさらに密な交流を行いました。彼らは広大なキャンパスを案内してくれたり、学食での買い方を教えてくれたりと、非常に親切でした。また、「中日青年友好交流大会」では、私たち日本側からは「恋するフォーチュンクッキー」を披露し、一週間の思い出を詰め込んだパフォーマンスを行いました。中国側のパフォーマンスは非常にレベルが高く圧倒されましたが、限られた時間の中で準備した私たちの発表にも大きな意味があったと感じています。

この一週間の訪中で改めて感じたのは、日本の生活環境がいかに恵まれているかということです。衛生・サービス・食の質、すべてが高水準であり、それが当たり前ではないということに気づかされました。そして何より、文化や人と直接触れ合うことでこそ、本当の意味での理解が生まれるという確信を得ました。

今後の日中友好のために私ができることは、偏見を持たずに互いの文化に触れる機会を増やすことだと思います。両国間には根深い偏見が存在し、それを言葉だけで解消するのは

困難です。しかし、今回のような訪中団のように、若者同士が直接出会い、話し、共に時間を過ごすことが信頼関係の第一歩となります。特に、思想が固定化されがちな高齢世代ではなく、私たち若い世代が率先して行動することが、未来への橋渡しになるのだと思います。

中国は経済的にも軍事的にも大きな存在感を持つ国であり、日本にとって隣国である以上、友好関係を築くことは双方にとって大きな利益になります。私はこの経験を通じて、日中のより良い未来のために少しでも貢献したいと強く感じました。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださった山田先生、県協会、そして日中友好協会の皆様に心より感謝申し上げます。

「リアルな中国で感じた歴史と人々の温もり」

1-A 横浜国立大学 小林花音

はじめに

中国への訪問を前に、私は慣れない環境で一週間、出会ったばかりの人たちと過ごすことに対する不安でいっぱいでした。私は中国へ訪れるのは三回目でしたが、中国では英語が通じにくかったり、食事も慣れない味が多かったりするということを知っていたからこそ、このような気持ちがより大きかったのではないかと思います。しかし、実際に中国に足を踏み入れると、その不安を吹き飛ばすほどの景色と出会いが待っていました。

1. 歴史や文化について

上海歴史博物館では、中国の成り立ちや偉人について学び、京劇の衣装や古い茶器の展示を通じて、中国の豊かな歴史と文化の奥深さを感じました。

また、山西省の雲崗石窟や平遥古城などの世界遺産を巡る中で、中国の歴史的遺産の素晴らしさと、それらを守り継承する人々の努力を実感しました。特に印象に残っているのは、平遥古城付近にあった科挙博物館での展示です。実際の試験で使用された道具や、合格者についての紹介などがなされており興味深かったです。郷試、会試、殿試の三段階の試験すべてに主席合格したのは、科挙の1300年という長い歴史の中でも数人しかいないというお話を聞き、試験の厳しさを実感しました。このような面が現在の中国の受験戦争の厳しさにもつながっているのだらうと感じました。

2. 交通や安全意識について

北京へ向かう際、初めて高速鉄道に乗車しました。車窓からは、広大な棚田、平屋の住宅街、高層ビルが立ち並ぶ都市部など、移り変わる風景を楽しむことができました。移動するだけで中国の多様な景色を堪能できることに驚きました。

また、警備の硬さについても衝撃を受けました。あらゆるところで荷物検査が行われており、またそれらの検査はとてもスムーズでした。これは、2008年の北京オリンピック開催を契機に中国政府が公共の安全のために地下鉄や観光地でも荷物検査を義務付けているからだそうです。一方、一般道ではかなり自由に車が走行していて、少し危ないと感じる場面もありました。これらのことから、日本との意識の違いを実感しました。

3. 大学での交流について

山西大学や中国人民大学では、現地の大学生と短い時間ではありましたが交流することができました。彼らは非常にフレンドリーで、日本のアニメやキャラクターなどの共通の話題で盛り上がることができました。大学のキャンパスは日本よりも広大で、図書館や博物館、講義棟、カフェ、食堂などが整備されており、その充実ぶりに驚きました。中日青年友好交

流大会では、太極拳や京劇などのパフォーマンスを披露していただき、圧巻の演技に感動しました。演者の方と実際にお話しした際には一緒に写真を撮ろうと声をかけてくださいました。お互いの文化に触れたことで心の距離が近づいたように感じました。

4. 班での活動について

私が一番不安に思っていたのは、同じ班の人たちとうまくやっていけるかどうかです。はじめは少しぎこちなくはありましたが、様々な景色を共有していくことで自然に仲を深めていくことが出来ました。食事やパフォーマンスの練習を一緒にする中で、班だけではなく同じ号車のメンバーとも話す機会ができ、本当に嬉しかったです。この訪中団に参加したことで、中国についての理解を深められただけでなく、たくさんの人との出会いにも恵まれました。それぞれの中国に対する考えを共有する機会も得られ、新しい視点も得ることが出来たと実感しています。

5. 反省と今後の展望

今回の訪問で中国の歴史や文化に触れる中で、事前にもっと中国について学んでおくべきだったと感じました。時代背景や意義についての知識が深ければ、より一層の感動を得られたと思います。また、日本の文化についてももっと知っておくべきだったと感じました。中日青年友好交流大会にて、私たちの班でもパフォーマンスを披露しました。しかし、それだけでは日本の文化について十分に伝えられなかったと感じました。今後は歌舞伎や能などの文化について私自身が学ぶと同時に、その歴史や魅力を人々に伝え、日中双方の理解を深めていきたいと考えています。

6. さいごに

訪中団の一員として参加できたことは、私にとって貴重な経験となりました。現地の人々との交流や自分の目で直接中国の姿を見ることで、文化や歴史への理解が深まり、日中友好の重要性を再認識しました。中国に興味を持ったきっかけは、中国語の学習を楽しんだという非常に些細なものでしたが、これをきっかけに世界の広さを肌で感じることができました。今後も自分が関心を抱いた物事や訪中での経験、そして出会った方々とのご縁を大切に、日中友好の架け橋となるよう努めていきたいと考えています。このような機会を下された皆様、本当にありがとうございました。

「訪中感想文」

岩手大学 4年 杉田周嶺

一週間にわたる訪中は本当にあっという間だった。毎日が朝から晩まで非日常で楽しい体験の連続で、訪中が終わってから一週間が経とうとする現在も訪中ロスを引きずっている。

それはさておき、今回訪中にあたって自分が掲げていた旅のテーマの一つは中国に対するイメージのアップデートであった。生の中国を体感することで、日本のなかだけで培われた中国に対する偏ったイメージを変えたいと思い訪中に臨んだわけだったが、実際あらゆるイメージを覆されることとなった。まず僕自身が中国に対して漠然と抱いていたイメージは、失礼なのは承知の上だが、「汚い」、「うるさい」、「自己中」、「怖い」などのようにネガティブなイメージが強かった。しかし、実際訪れた中国は、街は驚くほど綺麗で交通も整備されており、人々も優しく、街路樹や緑地も豊富で本当に魅力的な街であり、それらのイメージは大分払拭された。ただ、緑が多いわりに昆虫が非常に少なかったのは不思議だった。農薬散布を日本以上に徹底しているのだろうか。また他にも、思った以上に観光地が観光客で混雑していなかったり、想像とは真逆に英語が全然通じなかったりするなどギャップを感じる点は多くあった。

逆に空港に監視カメラがおびただしい数設置されていたり、恐らく警備用のドローンが街を巡回していたりするなど、中国が監視社会であるというイメージ通りの面を観察することもできた。

また、純粹に中国旅を楽しむというのも訪中の目的であったが、結論から言うところの訪中を本当に満喫することができた。ここでは、中国での楽しかった思い出を観光、食事、交流と三つに分けて振り返っていききたい。

まず観光について、さまざまな名所を訪れることが出来た。上海では一日目にクルージングで夜の壮大な夜景を満喫し、昼は 88 ビルの高層から街並みを見下ろして、上海の発展規模に圧倒された。二日目に訪れた上海歴史博物館では、さまざまな時代の装飾品や物品を拝見し、なかにはいかにも中国テイストの歴史的な品々もあって、中国の歴史や文化を分かりやすく感じる事が出来た。田子坊散策では活気ある若者文化の根付いた街並みに触れ、お土産を買ったり現地のタピオカミルクティーを飲んだりして観光を楽しんだ。フルーツハーブティーのお店で量り売りのグラム数が分からず、店の人に大量に入れられたことに気づかず、3000 円以上も散財したことも思い出である。

山西省では様々な歴史的な名所に訪れることができたが、中でも世界遺産である雲崗石窟、平遥古城が特に印象に残っている。雲崗石窟は今まで見たことのない規模の石壁に掘られた彫刻や像の光景に圧倒された。平遥古城も本当に素晴らしかった。四方を囲む巨大な塼の上を歩く体験はとても刺激的で、まるでゲームの世界に入ったかのような感覚になった。また塼の上から臨んだ城下町の景色も、そのまま時代劇のセットに使えるような風格

があって非常に面白かった。

そして北京では万里の長城を訪れることが出来た。子供のころから憧れていた場所であり、とうとうお目にかかることができ本当に嬉しかった。実際登ってみると山の稜線につづいた城壁は想像以上に険しかったが、頑張って登った後見下ろした景色は憧れの光景であり感無量であった。

次に食事について振り返りたい。食事は色々な意味で実に刺激的だった。まずどこの都市においても、日本でなじみのある中華料理がほとんど出ないことに驚いた。メニューとして確立されているかも分からないような見たことない料理の連続で最初は非常に戸惑ったが、それらの料理がそれ以降も再び出てくることに気づくと、それらを一つ一つメニューとして認識するようになり、ようやく本場の中華料理を体系的に体感することができた。これは日本の中華料理しか食べていなかったら絶対にわからなかったことであり、非常に良い経験になった。料理一つ一つのボリュームが凄くて、品数も多いので毎回残してしまうのは心苦しかったが、それも日本ではある意味体験できないようなことであった。料理自体はやはり中華特有のスパイスが全体的に効いていた。上海料理は全体的に味付けが甘く、日本のものとはかなり異なったが、山西省や北京では日本人の舌にも合うような味付けが多く美味しかった。全体的に骨付き肉が多く非常に食べづらかったこと、コース料理では毎回非常に優しい味のスープが絶対に出てきてとても美味しかったこと、食事の最後にはかならずスイカ、メロン、ドラゴンフルーツが出てきて特にスイカが信じられないくらい甘くて美味しかったことが印象に残っている。円卓での食事が多く、それも楽しかった。

最後に人々との交流である。最初に言うと今回の旅でこれが一番印象に残っている。まず中国の大学生との交流である。山西大学と中国人民大学の学生と交流することができたが、皆本当に素直でいい子で友達になりたい人ばかりであった。皆日本語を学んでいることもあって積極的に話をしてくれて、こちらの質問にも快く答えてくれた。話をする中で人種や言語の違いはあっても、価値観や感じ方は同じ年代の若者だと分かり、非常に親近感が湧いた。異文化交流の経験がほとんどない自分にとっては新鮮な体験だった。本当はもっと長い時間話したかったが、時間がなく、あまり交流できなかったのは心残りである。

そして何より思い出になったのは日本の大学生との交流である。これは一見わざわざ訪中団として中国に向かったという名目上、一番の思い出というのはほめられたものではないのかもしれない。しかし、ここまで色々な大学のさまざまな学年の学生と交流できたのはこの訪中団プログラムならではだと思ふ。一週間ずっと同じバスに乗り、同じ班で過ごした仲間とは色々な話をしたし、一日中お互いに写真を取り合って、ホテルに帰っても毎日のように遊んでいた。僕は今回パフォーマンス係として活動したが、パフォーマンスに向けての全員でのダンス練習や、同じパフォーマンス係の皆との横断幕の準備も本当に楽しかった。パフォーマンスは無事成功することが出来たし、反響も想像以上に良くて嬉し

かった。細かく書くとキリがないほど、普段の大学生活では得られない濃密さの交流があり、その一つ一つが刺激的で楽しく、23歳にもなって修学旅行気分を満喫できた。今はもうそれぞれ元の大学に戻り、別々の方向に向かって歩いていると考えるとどこか寂しいような不思議な感覚である。

訪中を通して、中国に対する良いイメージも悪いイメージもアップデートすることができたし、観光、食事、交流とあらゆる面で中国を体験することが出来た。ただ今回の訪中ではいわゆる下町のような大衆文化との関わりはしていないため、いつかまた中国に行くときはそれらの文化にも触れてみたい。この訪中で得た経験を活かせるように、今後の日中友好に少しでも寄与できるように、これからの自分の発信につなげていきたい。

最後に、この訪中団プログラムを企画してくださった日中友好協会の皆さま、中日友好協会の皆さま、支援をしてくださった中国政府、けん引してくださったガイドの皆さま、その他すべての関係者の皆様のおかげでこのような体験ができたことに深く感謝いたします。改めて本当に有難うございました。

「面白い国、中国」

1-A 信州大学 竹内朱里

今回の大学生訪中事業では、短い渡航期間であったがとても実りのある経験を積むことが出来たと考えている。GDP 世界二位となった発展国としての中国、悠久の歴史を持つ中華としての中国、どちらも実際に体感できたことにとっても満足している。まさに、3年間学んできた中国語、中国文学、中国文化の知識を確かめる機会であった。

一日目に上海中心部の街並みを見た際には、見上げなければ頂上が見えないビルがずらりと並ぶ光景に圧倒された。夜のクルーズ観光では、燦燦と光り輝く外灘の巨大な建造物に、異世界の景色かと思ったほどである。まさに魔都上海だった。上海浦東空港から市内に向かう際にも車線が多く整備された車道とその横を通るリニアモーターカーを見て、東京以上の都市だと実感させられた。

その発展度合いは地方である山西省、高鉄の車窓から河北省の街を見た際も肌で感じた。省都を離れても高層マンションが並んでいるのである。高鉄の路線図も広大な中国のほとんどの主要都市を結べるように通っている。北京は広いが、地下鉄が張り巡らされており大きな東京のようだ。交通網は日本の何倍もの面積を持つ国と思えないほど発達しており、中国の開発の度合いを目の当たりにすることができた。

中国の発展に目を剥いたが、中国の伝統を肌で感じたのも事実である。現地に降り立った時から、よく広告で粽子(ちまき)の画像や映像を見た。もしやと思って調べてみたところ、五月末に農歴の端午節がありやはりかと納得した。端午節が近くなった渡航の後半ではホテルの朝食や大学の食堂に粽子が並んでいるのを確認して、中国はやはり農歴で民衆の生活が回っているのだと実感した出来事であった。また各地で見たのは「哪吒」のグッズやイラストである。哪吒は『封神演義』などで有名な少年神である。2019年に公開された『哪吒之魔童降世』が中国国内で大ヒットし、その続編が今年公開されこれまたヒットしていることは知っていたが、どこに行っても東海竜王の息子敖丙とセットにされたグッズを見かけて古典キャラクターが現代でも親しまれていることを感じた。

山西省では、山西省出身の人物で一番有名であろう関羽と、創作ではその愛馬となっている赤兎馬のかわいらしいぬいぐるみが雲崗石窟の土産屋で売っており、日本と同じような偉人のデフォルメに笑いながらも買ってしまった。また省都太原のホテルは新しくきれいな設備でとても洗練されていたが、朝食会場には赤い旗のようなものが並んで吊り下げられていた。それには王之涣や白居易といった山西省出身のビッグネームたちの詩や山西省の古跡を詠んだ詩が書かれていた。随所に古代からの文化を重用しているのも、中国の人々がいかに古きものを重んじて、現代にも継承しているのかを窺うことが出来た。

中国の発展の伝統文化を実際に見ることが出来たわけだが、実際はきれいに見えるトイレでも紙はないしカギは壊れているし、高鉄の窓は汚いし、ホテルの冷蔵庫はなぜか未設置だし、食器はちょっと汚いし、歴史がありそうな建物でも明らかに新しく建てられたよ

くわからないオブジェがある(文革の影響もあるだろう)。旅の途中には、ハプニングに対して色々な感情を込めてこの国は面白い国だと口にした。人々の気質も国の細部も含めて「面白い国」である。来る九月に中国へ一年の留学を控えているが、今度はその面白さにどう対処するか、実際の中国を学びながら体得していきたいと思う。最期に、この訪中に携わった全ての人々に感謝を申し上げたい。

「世界市民と日中友好」

1 班 東京科学大学 田仲大輝

私は、この訪中によって、初めて日本を出るという経験をすることができた。各都市を回る中で、様々な観光名所や現地の人との色々な形での交流ができた。そして、私はこの訪中を終えて、世界市民と日中友好の2点について考えさせられた。

まず、世界市民についてである。この訪中を通して日本では得られないようなことをたくさん実感したが、上海に絞って述べる。上海は、中国で最も発展している都市だと認知していた。イメージ通り、上海タワーとその付近の高層ビル群には圧倒された。夜のクルーズ船遊覧中、豪華にライトアップされたビル群の夜景を見たが、改めて上海の経済力を肌で実感した。また、上海歴史博物館で目にした日中戦争の記録がとても印象深かった。中国では、抗日戦争と称されている。日本では、米国との太平洋戦争の歴史は学ばれているが、日中戦争の歴史をそこまで詳細に知っている人は少ないと思われる。博物館で、上海市内の建物が日本軍に破壊または占領された時の写真や、日本軍が中国に対して宣言または提示した資料を多く見た。私たち日本人は戦争で多くの被害を受けて負けたと考えがちだが、中国といった他国に危害を与えた歴史を忘れてはならない。戦争の勝敗だけでなく、それぞれの国でどのような過程があったのかにもしっかり目を向けることの重要性を実感した。日本だと中々見る機会がない貴重な展示であった。

他にも、老婦人が自分の未婚の子供のプロフィールを書いて結婚相手を探す風景、日本よりもキャッシュレス化が進んでいたこと、中国国旗が街中の至る所に掲げられていたことなど、日本では見れないまたは考えられないようなことに出会えて、とても興味深かった。中国をはじめ世界中の国とのギャップを見つけることの魅力を感じた。

私は、今まで日本を出たことがなかった。この訪中の経験で、日本との文化の違いを見つけることの楽しさ・日本人が知らなかった日本相手国間の歴史を知ることの大切さを実感できた。今の社会もそうだが、これまで以上に世界がグローバル化の一途を辿っていくことは間違いない。そこで、私は「世界市民」を目指そうと決意できた。「世界市民」とは、国や民族を超え、地球上の全ての人間を同じように大切にし、地球の平和と持続可能な社会の実現に貢献しようとする意識を持つ人をさす。実際に中国に行って、中国で実感したことはかけがえのない貴重な宝である。海外に行くということは、単にお金をかけて旅行を満喫することのみならず、「世界市民」に自ずと近づくために自身の視野と知見を広げさせてくれることだと考え直した。

そして、今回の訪中団において中国側が行ったことへの報恩の思いも忘れてたくない。上海タワー、雲崗石窟、万里の長城などの名所を回るプログラム、豪華な食事・ホテルサービスを手配していただいた。6日目の中日青年友好交流大会では、中国の学生による高貴なパフ

パフォーマンスをみせていただき、日中両国の青年が交流して相互理解を深めて、未来永劫にわたって両国が共に発展していくことの大切さを受け取った気がする。中国をより身近に感じさせてくれた中国には、感謝してもしきない。日本は中国から様々な文化の恩恵を受けているのにも関わらず、戦争をしたという負の歴史もある。それでも、「日中友好」を根底に考え続けた方々の計り知れない努力において、訪中団が派遣され続けている今に至ると考えると本当に感慨深い。

そこで、私は中国語を本気で学ぼうと決意した。ちなみに、私は全く中国に触れたことがない状態で訪中団に参加した。十分に中国を満喫することはできたが、中国語を習得して中国の人々との交流をより深いものにして、「日中友好」に微力ながら寄与できるのではないかと考える。この訪中団を通して、中国のことが心から好きになった。この訪中で私たちのため、「日中友好」のために尽力してくれた両国のスタッフの方には、報恩の思い出いっぱいである。私も「日中友好」のために何かをしたいと思うようになった。

まずは、自分が現地に赴いて体感してきた中国を一人でも多くの仲間に伝え、中国語・中国の歴史や文化を、時間をかけて学ぶ。そして、「日中友好」に少しずつ寄与していきたい一心である。最高の 1 週間であった。改めて今回の訪中団に携わっていただいた両国のすべての関係者の方に多大なる感謝を申しあげたい。

「初めての中国」

1-A 大分大学 内藤志織

①中国文化を学んで得たこと

今回の訪中では上海・山西省・北京を訪れた。

上海では上海ジンマオタワー88階展望台を見学した。中国では8が縁起の良い数字らしくそれになぞらえて88階にしたのだと知った。日本でも7の他に8が縁起の良い数字とされているため、あまり変わらないなと感じた。

上海歴史博物館では、上海の歴史を古代から現代まで詳しく知ることができた。特に興味深かったのは1800年代から始まった戦争の歴史である。戦争のブースは他と雰囲気が異なり見ていて苦しい気持ちになった。なぜこのようなことになってしまったのだろうと思いを馳せ、これからの歴史でこのような負の遺産を残しては行けないと強く感じた。戦争を起こさず、日中友好を築いていくために私たちにできることはやはり民間交流できてあり、友好関係を築くことの重要性を実感した。

山西省では雲崗石窟・華嚴寺・晋祠・平遥古城を訪れ、北京では万里の長城を訪れた。そのどれもから中国の長い歴史を感じることができた。私は中国の歴史に詳しくなかったため、ガイドさんの話を完璧に理解することはできなかったが、中国の歴史や文化に対する興味を持つきっかけになった。

②日中交流を通して学んだこと

今回の訪中では日中交流として山西大学と中国人民大学を訪れた。訪中前は日本の学生以外と交流をしたことがなかったため、うまくコミュニケーションが取れるかどうかとても不安だった。しかし、交流した中国人の学生はとても日本語が上手で、円滑なコミュニケーションを図ることができた。中国人民大学で交流した学生は日本語を勉強して3年と言っていたが、日本語レベルがとても高く最初は日本人と勘違いした。一方で私は中国語を2年勉強していたのにも関わらず、ほとんど何も話せないでいたため今までの自分の勉強に対する姿勢を深く反省した。中国人の学生との交流を通して、私も自分の中国語レベルを上げたいと強く感じるきっかけとなり、良い刺激をもらうことができた。

また、この訪中では学生交流の他にも観光地で話しかけてくれた現地の人々と交流をする機会があった。華嚴寺・平遥古城近くのレストラン・万里の長城でそれぞれ1組ずつ現地の方が声をかけてくれた。私たちが日本人だと知ると、知っている日本の文化や知識を披露してくれたり、こちらも拙い中国語と英語を用いて交流をすることができた。このような交流から日中友好が始まるんだと身をもって実感することができた。

③自分自身の価値観の変化

訪中前は中国に対してあまり良くない印象を抱いていたが、実際に訪れてみてその偏見

は完全に払拭された。現地で交流した方々はみんな良い人で親日の方が多かった。自分自身の価値観の変化としては、訪中前は日々生活を追われストレスで消耗しきっており、頭が凝り固まっていたように思う。しかしこの訪中で出会った中国人の方々や訪中団の方々との交流の中で、自分のしたいことに正直な生き方や、もっと自分自身が自由になれる価値観を教えてくれた。私はこの訪中団に参加して多くの学びを得ることができた。

「中国での景色」

1-A 横浜国立大学 中島しゅう

中国への憧れを持ったのは、スケールの大きな都市の景色に魅せられたからだ。上海の摩天楼や、8D都市と呼ばれる重慶、紫禁城を有し歴史を持つ北京など、日本とは違った構造を持つ都市を調べていくうちに中国に強く惹かれていった。大学の第二外国語で中国語を選択したのは、約十億人もが話す話者が世界で最も多い言語だからという理由に加え、そのような憧れがあったからかもしれない。訪中団に参加したのも、この国の文化を知ろうと中国語の勉強に励む中で出た大学の中国語朗読コンテストで賞を取ったことがきっかけだ。

実際に訪れて体感した中国の都市は、すべてスケールが今まで訪れたどの都市とも比べ物にならないほど大きく、都市をバスで駆け巡ったり歩きまわったりするのに心が躍った。訪れた4つの都市ではいずれも、遠くに建ち並ぶ同じ形のマンション群や歩いては渡れない広すぎる道路を持つ巨大な都市の要素をそれぞれ共通して持っており、膨大な人口を抱えている中国を形成しているのだという事実を突きつけられた。太原では、川沿いの公園や高層マンションの谷間に並ぶ屋台など、巨大都市で暮らす人々のヒューマンスケールの生活を見た。広場で大音量の音楽を流しそこに居合わせた人々が自然発生的にダンスをしている姿や、広い歩道を生かして茶屋のテーブルが外まで広がっている様子からは、与えられた広いスペースを自分たちらしく使う中国人の都市でのライフスタイルを発見し、この国の人々のおおらかさや良い意味での気を遣わない性格が少し理解できた気がする。また、平遥古城や晋祠で見た中国の遺跡は、現代の都市を考えるヒントになっていて、日本の建築技術の由来である中国の建築技術を学ぶことができたのは、建築を専攻としている身として非常に興味深い機会だった。見るものすべての情報が刺激的で、自分の手で描きとめたいと、飛行機や高速鉄道の移動の時は景色のデッサンをしている滞在中の日々だった。中でも印象に残っている景色は、太原から北京に移動する高速鉄道の窓から見えた黄土高原だ。乾燥した地域で、植物がまばらに生えており黄土色の岩が一面に広がっている、見たことの無い雄大な景色だった。日本の黄砂の原因とされるこの黄土高原の段々畑で、上半身裸で畑作業をしている人を見たとき、日本にいただけでは厄介だと思ってしまう場所にも、それぞれの人の暮らしがあることを実感し、実際に訪れない限りは悪いイメージを持ち続けてしまうのだとも感じた。

また、中国の大学を訪れて現地の学生生活を知ることができたことも印象的だ。特に、山西大学の図書館で勉強に励む学生たちの、中国の厳しい競争社会を生きている姿を鮮明に覚えている。また、中国人の友人が育ってきたバックグラウンドも想像することができたことも実りのあることだった。自分の住む大学の国際寮で出会った中国からの留学生である彼らから教えてもらった母国の魅力を直接見ることができ、自分と育ってきた環境が違う相手のことをまたひとつ理解できたかもしれないと思った。また、中国人民大学で参加した日中青年交流大会では、これほど日中友好を思っている人が一度に集まっていることを実

感じた。その夜の歓送会で、在中国日本大使館の方が日中友好の最も重要なことはどんな外交よりも若者同士の直接のかかわりだと考えているという話を聞き、自分のひとつひとつの人とのかかわりが日中間の民間交流につながっていることに気づいた。訪中団に参加する以前も中国人とかかわる機会は多くあっても日中友好という国同士のテーマについて考えることはなかったが、自分たちの世代が日中の関係に影響を与えられるのかという壮大なことを考えたりなどとした。

訪中団での7日間は、毎日が本当に楽しかった。中国各地の観光地を案内してもらい、毎食の中国料理では満腹になるほどのもてなしを受けた。素敵な機会を準備してもらったことに感謝したい。そして、1週間をともにした友人たちは、みなが中国に興味を持っていて、彼らと中国での滞在中に体験すること全部を共有できたことは貴重な思い出。驚くほどに楽しく、数えきれない学びのあった訪中団を、自分が20歳であるときに経験することができて本当によかった。

「中国の広さと人々の誇りにふれて」

1号車 - A班 お茶の水女子大学 中村直

中国は、一つの国としてまとめて語るのが難しい。今回は、上海・山西省・北京の三つの都市を訪れたが、たった三つの都市でも気候や街並み、食事など生活を作り出すもの全てに違いがあった。山西省では、大同市から太原市までをバスで四時間かけて移動した。バスに乗りながら、私は、日本だったら四時間もあればバスで東京から名古屋まで行くことができるなあ、と思い、改めて中国という土地の壮大さを感じた。

三つの都市を訪れて、共通して感じたことが一つある。それは「現地の人たちが自分の国に誇りを感じていること」であった。最初に訪れた上海では、遊覧船に乗ってビルの灯りに照らされた上海の夜景を見た。上海は中国有数の金融都市であり、夜が更けても輝き続けるビルの数々を見て、最初は「これだけの人数が夜も働いて経済を作りあげているんだな」と思った。しかし、船から降りてビルが並ぶ通りを歩き、そのビルが光っているのはフロアの照明ではなく、建物の外装部分に取り付けられた電飾が理由だと気がついた。そのビルには人の気配はなく、私は衝撃を受けた。つまり、上海の夜景という観光名所を成立させるために、無人の建物がライトアップされているのである。この光景が、私たちが訪れた日のような祝日でも記念日でもないなんでもない休日に成立していることこそ、現地の人たちが上海という場所に価値を感じ、魅力的な場所にするこへの理解があるからだろうと感じた。

二つ目に訪れた都市、山西省でも、山西省に住む人たちの誇りを実感した。この中国滞在中の一週間で、現地大学生との交流とは別に、観光地やレストランで現地の方から声をかけてもらいお話しする機会が三回もあった。そのうち二回は、山西省の大同市にある華嚴寺に赴いた時、晋中市の平遥古城を訪れた時であった。どちらも現地の人から声をかけてもらい、私の初めての海外旅行先がこの中国だと伝えると喜んでくださった。そして山西省を訪れての感想や、名物の刀削麺を食べたかどうかを訊かれた。話していて、彼らが自分の住んでいる場所へ愛を持っていることがひしひしと伝わってきた。観光客である私から質問するのではなく、彼らから山西省の魅力を伝えてくれたところに私は意外性を感じた。同時に、自分が今訪れている場所が、こうして誰かに話したくなるような場所であるという認識にさせられ、その後はそれまでの観光よりもさらに一つひとつをじっくりと眺めるような楽しみ方ができた。

最後の都市、北京では万里の長城を歩いた。万里の長城には私たちのような外国人観光客も大勢いたが、それを上回る数で中国人の観光客やツアーの団体客がいた。中国は土地が広くて都市間の移動に時間がかかるので、国内の名所を見て回るのにも時間がかかる。そのため国内旅行に需要があるのだろう。万里の長城ではない場所にも、観光客と思われる中国人は大勢いた。そして万里の長城では、手に中国国旗を持っている人がいたり、中国国旗を施したお土産物が売っていたりする光景を目の当たりにした。私が今まで見てきたなかでは、日本でこのような光景を目にすることはなかった。このように、自国への誇りと、その表

し方が日本と中国では異なると思う。どちらが良い悪いではなく、中国という広い国土面積を持つ国では、同じ国でも都市が変わるだけで全く違う様相を呈する。それが逆に、自分が住んでいる場所への愛着に繋がるのだと、今回の訪中を通して感じた。

最後に、観光地やレストランで現地の方から声をかけてもらいお話しする機会が三回もあったことが、私に影響を与えた。現地の方も私も共に、相手の言語が拙かったが、それが逆に、私にとっては覚えたてで自信のない中国語を口に出して使ってみる勇気になった。ほとんどは翻訳機とジェスチャーを用いてのコミュニケーションだったが、この体験をきっかけに中国語学習への意欲が以前に比べて格段に増した。流ちょうな中国語でコミュニケーションが取れるようになったら、中国へのイメージもまた変わると思う。その時を楽しみにして、中国語学習を続けたい。

「実際の中国を見て感じたこと」

1-A フェリス女学院大学 濱中愛凜

私は大学で中国語に初めて触れ、授業では学ぶことの出来ない中国の伝統文化や中国の現状に興味を持ち、今回の訪中団に参加しました。また、SNS上でよく目にする中国人への批判的な情報の真偽を確かめ、私達が自然と抱いている中国人への偏見を覆す為に自分の目でしっかりと実際の中国を見るということを目指しました。

訪中前の私は正直、中国や中国人への印象は良いものではありませんでした。ニュースやSNS上に出回る中国人に関する情報が、悪いものばかりだからです。中国へのマイナスなイメージはこのようなメディアからの情報によって作られ、私達をステレオタイプにしました。訪中後、私はこれらの中国の情報や、中国人へのイメージの全てが正しいわけでは無く偏ったものであると気が付きました。まず中国という国に対してですが、大気汚染や汚いというレッテルを貼られていることがあると思います。実際、確かに地域によっては空気が霞んだように見える所もありましたが、建物や町並みは目が釘付けになってしまう程美しかったです。大都市上海では、高層ビルが辺り一面に聳え立ち中国の経済力を肌身で感じられました。また、バスで山西省へ移動している道中では背の高い建物が少なくなり、遠くに山々が広がるのどかな風景を楽しめました。都市部と郊外とはまた違った良さがあり、「汚い」というイメージとはかけ離れているなという印象を抱きました。次に中国人に対するイメージでは、マナーを守らないことや、親切ではないという固定観念が強いと思います。実際、私は現地で中国人の温かさを感じました。様々な観光地で、フレンドリーに話しかけてくれる中国人の方や、大学交流で一生懸命日本語を使いながら大学内を案内してくれる現地の学生など、日本にいただけでは感じる事の出来なかった中国人の優しい親切な一面を見ることが出来ました。中国と日本は近くて遠い隣人です。同じ漢字・仏教文化を持ち、経済面でも親密に関わっています。在日中国人は多く、日本国内でも中国人と関わる機会は多々あります。これ程日本人と中国人は近くにいるのにも関わらず、私たち日本人は中国に関する断片的な情報のみで中国人をラベリング化し、一方的に遠ざけてしまっていたのかもしれない。私は、実際に中国に行ったことで私たち日本人が抱いている中国人へのイメージが誤りであったことが分かりましたが、きっとこれは自分の目で見て肌で感じる、体験すること以外では凝り固まった価値観を覆すことは難しいものだと思います。実際、私達の訪中後にアップされた訪中団のニュース記事には、「日中友好は築けない」、「中国人に日本の若者が汚される」など攻撃的で批判的なコメントで溢れかえっていました。私は、悔しくてやるせない気持ちと同時に、訪中前までは自分自身もこのコメント側の人間だったということに気づかされました。日本人に深く根付いた中国人への偏見が、そう簡単には払拭することのできない大きな課題だということを改めて実感しました。私は実際に中国へ行き、中国人と交流した身として、「本当の中

国」を日本人に伝える使命があります。中国に対する偏った見方を無くしたいと心の底から強く思います。「日中友好」、この言葉だけ聞くとスケールの大きいもののように感じますが、日本人として“中国の良さ・素晴らしさ・優しい国民性”を周りに広めていくだけでも「日中友好」への大きな一歩を踏み出していると考えています。日本国民全員の価値観を変えることは難しくとも、せめて私の周りや発信する SNS が届く範囲内では「本当の中国」について語り、多様な視点から中国を見せていきたいと思っています。

「百聞不如一見」

1-A 筑波大学 松原風花

私が訪中団に参加したのは、人生で一度は中国に訪れたいと思っていたからです。私は以前、オンラインでの日中青年交流事業に参加したことがあります。それ以来、隣国である中国についてもっと知りたいと思っていたので、中国に行ってみたいという気持ちはずっとありました。一方で、まだ中国に対してさまざまな不安もあり、個人的に行くのを躊躇うという気持ちもありました。そこで、中国政府の要請を受けて派遣されるという形の訪中団を利用しようと考え、応募することにしました。私の動機にはあまり良いとは言えない面もあったのです。

このような経緯で実際に訪中した結果、私の中国観は大きく変わりました。人も、食事も、場所や施設も、行ってみなければわからないことや感じられないことばかりです。

例えば、都市の様子です。訪中前の私にとって中国と言えば、ビルが立ち並び、とにかく広大な都会というイメージが強かったです。もしくは、所謂中華街のような街を思い浮かべていました。しかし実際に行ってみると、想像とは違うことが多くありました。一日目の上海のナイトクルーズでは、SFの世界かのような美しい電飾の建物群を見ました。経済の中心地らしい豪華な様子であり、想像以上ではあるものの、これは私の中国のイメージからはあまり外れていないものでした。一方で、三日目と四日目に訪れた山西省は、砂漠に近い気候と風土であるようでした。上海とのギャップに驚きながら、日本の地方とはまた違った風景を興味深く感じました。最後の訪問地の北京は、中国の首都であるため、特に想像もつかないほどの別世界であると思っていました。しかし実際には、都会ではあるものの上海と比べると落ち着いて見え、異世界のような場所をイメージしていた私には意外に感じられました。このように三つの訪問地それぞれに個性があり、そこから中国の多様である様を体感しました。そしていずれの地でも、自分と同じような人たちが、自分と同じように暮らしていました。至極当たり前のことではありますが、テレビやネットではあまり見ることのない「日常」を感じることができました。

また、今回の訪中で接した中国の人たちも印象的でした。今まで私は、中国の人は皆声が大きくて少し怖いという偏見を抱いてしまっていました。日中青年の交流事業を経ても尚、特にそのような事業に参加していない人たちの輪郭がおぼろげでした。しかし、今回関わった人たちは私が思い込んでいたような人ばかりではありませんでした。最大限の魅力を伝えようと熱心に解説して下さったガイドさんたち、勤勉で真面目な大学の学生たち、その他温かく受け入れて下さった現地の方々など、知識・人格ともに尊敬すべき方が沢山いました。このような人たちが全てであると思うのは逆に良くない思い込みになりますが、私の考えていた「中国人」がほんの一部であることを実感させられました。

さらには、文化の面でも考えさせられることがありました。とりわけ、三日目・四日目の山西省と六日目の中日青年友好交流大会においてです。山西省では主に歴史体験をしまし

た。教科書にも名前が載っている雲崗石窟や世界遺産の平遥古城など、文字通り桁違いの歴史を持った場所に訪れました。この体験のなかで、過去の事物が残っていることの難しさや凄まじさを感じることはもちろん、昔の日本人もこのように訪中して仏教などの文化を学んだのかと思いを馳せたりもしました。古くから続いている日本と中国の交流の歴史を継承し、これからも良好な関係を紡いでいきたいと強く思います。交流大会では、日本青年と中国青年それぞれによる歌謡や舞踊、武術などのパフォーマンスを鑑賞しました。特に中国青年の演目に関して、どれも所謂「中国らしい」と感じるものばかりで、その素晴らしいパフォーマンスには感銘を受けました。この体験に感化され、私たちが「日本らしい」もの、すなわち我々の伝統文化をどのように継承していくべきか考えさせられました。私が一翼を担えれば非常に嬉しいです。

このように、あまり良いとは言えない始まりであった私の訪中団参加は、非常に意義のあるものとなりました。訪中を通して、今まで私が考えていた「中国」及び「中国人」が全体のごく一部であったことを、五感を使って学びました。さらには、歴史ある日中間の交流や日本の伝統文化を受け継いでいきたいと心から思いました。今回はありがたいことに七日間で三箇所もまわらせていただきかなり充実した一週間となりましたが、一方でまだまだ時間が足りないと感じた訪問地や今回行かなかつなかで行ってみたい場所もあるので、もう一度行きたいと思わされる旅となりました。

最後になりますが、このような機会をくださった先生、受け入れをくださった中国の方々、さまざまなサポートをくださった日本側の運営の方々、共に過ごすなかで良い刺激をくれた日本青年の方々に感謝の意を表してこの報告書を締めさせていただきます。

「訪中国で学んだ歴史と絆」

1-A 芝浦工業大学 村瀬礼

今回参加した「日中友好大学生訪中国」の2週間は、振り返れば瞬く間に過ぎ去った。しかし、その短さを忘れさせるほど内容は濃く、私は班長としても一個人としても大きく成長できた実感している。ここでは、現地で受け取った歴史の重みと人と人との絆について、印象的だった出来事を中心にまとめたい。

訪中初日、私たちはアジアで最も高い超高層ビル「上海中心（センター）」を間近に仰いだ。地上 128 階・632 m という高さは、東京スカイツリーに匹敵するが、それが通信塔ではなく“オフィスビル”として都心に聳え立っている事実にもまず圧倒された。周囲を囲むビル群も一様に高く、眼下の街並みは人間の営みというより巨大な機械仕掛けの都市のようだった。

夜、黄浦江をクルーズしながら眺めたライトアップは、文字どおり“街全体がスクリーン”となる壮観で、建物一棟ごとを LED で装飾する発想と投資規模に驚かされた。日本であれば景観保護や採算の問題が立ちはだかるだろう。しかし上海は「やってみせる」ことで新しい価値を創り、今や“100 万ドルの夜景”と称されるまでに成長している。過去の成功体験にとらわれず、果敢に挑戦するハングリー精神——それこそが現代中国の推進力なのだと感じた。

3日目からは、北京で開かれる「日中青年友好交流大会」に向けて、参加者全員でダンスと歌のリハーサルを重ねた。中国側のパフォーマンスは完成度が高いと予想され、私たちも負けじと創意工夫を凝らした。副班長やパフォーマンス係とアイデアを出し合い、スライドには訪中に撮った写真を散りばめ、並びや小ネタで観客の心を掴めるようリハーサルを繰り返した。この過程で痛感したのは、ついこの前会ったばかりの人たちと一緒に「良いものを創りたい」という思いが一致すれば、一気に距離が縮まるということだ。班長としてメンバーをまとめる難しさもあったが、同時に人を信じ任せる大切さも学んだ。

3日目に訪れた雲崗石窟では、高さ十数メートルの大仏や緻密なレリーフが、かつての北魏仏教文化を雄弁に物語っていた。ギリシャ・インド・西域との交流を示す装飾のモチーフに、シルクロードを往来した人々の文化も感じることもできた。石窟を守る地元の方々の誇らしげな表情にも心を打たれ、文化遺産が「過去」ではなく「現在」に生きる財産であることを実感した。

次に向かった晋祠は 1000 年以上前に建立された古刹で、山西省の略称「晋」の由来でもある。境内に湛えられた「難老泉」を眺めながら、かつて李白がここに立ち詩を詠んだという事実に胸が熱くなった。幾世紀も前の詩人と同じ景色を共有することで、歴史が単なる暗記科目ではなく、今につながる話として立ち上がってくる気がした。

雲崗石窟では、高さ十数メートルの大仏や緻密なレリーフが、かつての北魏仏教文化を雄弁に物語っていた。ギリシャ・インド・西域との交流を示す装飾のモチーフに、シルクロードを往来した人々の文化も感じることもできた。石窟を守る地元の方々の誇らしげな表情

にも心を打たれ、文化遺産が「過去」ではなく「現在」に生きる財産であることを実感した。北京で開催された交流大会本番では、山西大学や中国人民大学の学生が披露した伝統舞踊や武術演舞の完成度に圧倒された。同時に、私たちのダンスと合唱にも拍手が贈られ、その高揚感は忘れ難い。言葉の壁を越えた瞬間、人と人は文化という共通言語で深く結び付けられるのだと思う。

この2週間で私が得た最大の学びは、歴史とは単なる過去の集積ではなく、現在を生きる我々が継承し未来へ引き継ぐリレーであるということだ。上海の超高層ビル群は、1950年代の水田地帯という“過去”の上に築かれ、新たな景観を生み出している。晋祠や雲崗石窟は千年の時を超え、人々の信仰と誇りを今に伝えている。そして私たち日中の学生同士が結んだ友情も、これからの時代を形づくる小さな歴史の礎となるだろう。

私は「知る」ことの喜びと、「つながる」ことの力を強く胸に刻むことができた。今回出会えた仲間、中国でお世話になったすべての方々への感謝を忘れず、次は私自身が両国の橋渡し役になれるよう努力したい。そして、この旅で感じた驚きと感動を多くの人に伝え、未来の交流の輪をさらに広げていくことを誓いたい。

「良し悪し」ではなく「違い」を認める

1-A 北陸大学 森麻美

今回の日中友好協会大学生訪中団を終えて、中国の広大な土地の中で近代化の中心である上海、歴史のある山西省、政治の中心である北京の3都市を巡る貴重な体験ができた。短い期間ではあったが、都市部の先進性と地方の歴史、そして人々の温かさに触れ、中国をより深く理解できたと感じている。

まず上海では、近代的な高層ビルが建ち並ぶ地域から国際都市としての印象を強く受け、その一方古い街並みが残る地域とのコントラストが興味深かった。金茂タワーから眺める上海は日本よりも発展しているように感じられ、ここ数年で国際的に台頭してきた中国経済の発展スピードの本髄を目にしたように思う。

山西省では、「中国 4000 年の歴史」と言われている通りの伝統的な中国の姿に触れた。平遥古城や云冈石窟などの世界遺産に訪れることができ、実際に数千年前に作られたままの城壁や仏像から、当時の様子に思いを馳せることができた。また、山西大学を訪れた際には、現地の大学生とすぐに打ち解けることができた。国や話す言語が違えど、相手のことを気遣い笑顔で対話することで、互いに良い時間を過ごすことができたと思う。

北京では、中国人民大学との交流で自身の武器である中国語を用いることができた。大学寮生活のリアルや学食の話、最近流行の言葉などを知ることができ大変興味深かった。大学の敷地内ですべての生活が完結するつくりも、日本では見ることはできない光景のため、人口の多い中国だからこそだと思った。長年の夢であった万里の長城にも訪れることができ、当時の人々が人力で作った壮大な景色に圧倒された。

今回の訪問を通じて何より印象的だったのは、人々の情の厚さ、温かさだ。日本のマスメディアから得られる中国のイメージは必ずしもいいものとは限らない。だが実際に関わる方は皆情に厚くとっても優しかった。人と人が関わる限り、認識の違いや対立は避けて通れないものだと思う。だがそこには「違い」があるだけで「良し悪し」は存在しない。中国の人々の行動の中で、日本の尺度をもって測るとどうしても理解できないことはあると思う。これは中国側も同じくだ。しかしそれも尺度を広げて、日本での考え方だけではなく大きくいろいろな側面から見ることであれば、「違い」として受け入れることができるようになるのではないか。完全に理解するのではなく違いを認め尊重し合うことが大切だ。このようなことを1週間の訪中で考えた。グローバル化の世界で生まれ、成長してきた私たちの世代だからこそ柔軟な考え方や、固定概念にとらわれない価値観をもって互いに対話し続けることが、日中友好の懸け橋、平和の共創に最も大きな役割を担っているように感じる。過去の歴史を学び、今を理解し、未来をともに築く。私一人にできることは限られているが、今回出会った人々との縁を大切にしながら、継続的に日中友好の一端を担っていきたい。また、日本の大切な隣国、中国と永遠に友好関係が続くことを切に願う。日本和中国是永远的朋友！

「訪中団で深まった中国理解と友情」

1-A 城西大学 山口愛唯

5/24～5/30の1週間、訪中団に参加し、濃密な時間を過ごすことができました。

私にとっては今回が2度目の訪中で、中国へ降り立ったときの空気感や雰囲気、人々のやりとりはどこか懐かしさを感じました。前回、訪れてからかなりの時間が経っていたため、訪中前は、私のイメージする中国が美化されすぎているのではないかと思っていましたが、そんな疑問は到着してすぐに消え去りました。中国の方々はとても親切で、心のこもったおもてなしをしれくださる素敵な国だと感じました。

山西省での出来事です。学校訪問の際に、たまたま近くにいた学生に話しかけたり、自由時間にはお店の方にたくさんの質問をしたりしました。どちらの場面でも皆さん優しく、私の拙い中国語にも嫌な顔をせず、快く対応してくださいました。文化の違いなのか、最初は会話中に表情をあまり変えないことに戸惑いを覚えました。感謝の言葉を伝えると笑顔で応えてくださり、別れ際には手を振ってくれました。

こうした温かな交流は山西省に限らず、今回訪れた上海や北京でも同様に感じる事ができ、中国の方々の優しさを改めて実感しました。また、訪中団を支えてくださったガイドさんやホテルスタッフの方々の温かい対応のおかげで、とても快適に過ごすことができました。特にガイドさんは各地域で異なりましたが、観光地の案内や歴史の解説だけでなく、些細な疑問や質問にも答えてくださり、毎日楽しく過ごすことができました。改めて中日友好協会の皆さま心より感謝申し上げます。

今回のプログラム前半では、主に歴史を学ぶことが中心となり、日本人同士の交流が深まりました。普段の学生生活において、他の学部と関わることがないため、この機会を通して多くの学びがありました。専攻する分野によって見方や考え方が異なり、自分にはない視点に触れることができました。感想の違いに驚きながらも、共感し合うことで「視野が広がる」という体験を実感しました。

後半2日間には現地の学生との交流があり、中国の教育レベルの高さに驚いたことに加え、学生の学びに対しての貪欲さに感化されました。交流後には中日青年友好交流大会に参加し、ステージでパフォーマンスを披露しました。大きな舞台に立つ機会はなかなかないため、大変貴重な経験となりました。想像していたより緊張せず、むしろ楽しみながらパフォーマンスを行うことができました。ステージでの姿に対して、交流した現地の学生から感想をもらったり、写真を撮ってくれたりして、本当に嬉しかったです。大会終了後には、他の団体の方々にも感想を伝えることができ、また、他の訪中団の日本人メンバーとも会話を交わし、素敵な交流をすることができました。今回出逢えた縁を大切に、今後も交流を深めたいと思います。

現在の中国では、電子決済やモバイルオーダーはもちろん、保険証の利用までスマートフォンひとつで完結するなど、日本よりもはるかにオンライン化が進んでいます。特に医療分野

でのオンライン化は、日本ではまだ普及が遅れているため、その差を強く実感しました。日本は古くから文字や食文化、様々な文化面で中国の影響を受けてきましたが、現在もなお、オンライン化において中国から学ぶ点は多いと感じます。中国はまさに日本の未来の姿であり、両国の関係は切っても切れないものであると改めて感じました。

私は、初めて中国を訪れたときから、中国に対してとても良いイメージを持っています。しかし、以前の私がそうであったように、日本ではまだ中国へのイメージが良いとはいえません。訪中団のメンバーにも少なからず、不安を抱いていた人がいたことでしょう。だからこそ、今回の経験を周囲に伝えることで、中国へのイメージが少しでも良い方向に変わり、日中関係について考えるきっかけとなることが、私がこの訪中団に参加した意義のひとつだと考えています。また今回の訪中で、自分の中国語力がまだ十分でないことを痛感したので、今後も勉強を続け、次に中国へ行く際には、より円滑なコミュニケーションが取れるよう努力していきたいと思っています。

最後に、今回の訪中団を支えてくださった団長をはじめ、日中友好協会の皆さま、そして関わってくださったすべての方々に心から感謝申し上げます。このような素晴らしい活動が、今後さらに多くの人に広まることを願っています。ありがとうございました。